

基調講演・要旨

基調講演①『コロナ後のコミュニケーションとイベントへの期待』

◆講演者:山極寿一(京都大学前総長)

1952年東京都生まれ。京都大学理学部卒、同大学院理学研究科博士後期課程単位取得退学。理学博士。屋久島で野生ニホンザル、アフリカ各地で野生ゴリラの社会生態学的研究に従事。京都大学総長、日本学術会議会長、国立大学協会会長、総合科学技術・イノベーション会議議員を歴任。著書に、『スマホを捨てたい子どもたち』(ポプラ新書)、『京大総長、ゴリラから生き方を学ぶ』(朝日文庫)等

◆講演要旨

講演タイトルの副題「社会とは何か？歴史の縮尺をもっと広げて解釈せねばならなくなった」に見られる様に、人類の集団規模の拡大による進化と、言葉以前の濃密な接触をとまなうコミュニケーションによって脳容量の増大が促進された事を根源に、言葉以前の共感コミュニケーションと言葉の発明以降の言語的コミュニケーションの多層構造の洞察から、コロナ禍で発生している危機内容と教訓を具体的に提示され、コロナ後の社会に必要とされる生活と文化とコミュニケーションと社会の在り方を、『シェアリングとcommonsの再考』と提唱され、新しいイベントの創出への期待に触れられた。

■「言葉の発明と脳容量の増大は関係ない」「霊長類の大脳化は社会の規模の増大に正の関係を持つ」「人間の集団規模とコミュニケーションは、10～15人は言葉が要らない共鳴集団で、30～50人は顔と性格を熟知して一致して動ける規模で、100～150人は顔と名前が一致する信頼できる仲間、それ以上になると、何らかの指標が必要となる。言葉の発明?」

■「言語以前のコミュニケーション～対面交渉と目の表情から気持ちを読む」「共感力を高める共食と共同保育～人間が共感力を高めた背景は子育てにある」「育児が音楽の能力を向上させた～音楽的コミュニケーション(共同の歌と踊り)」

■「言語の創出がもたらしたもの～見えないものを見せる・重さがなく、持ち運び可能・名前をつけて分類する・違うものを一緒にする・物語を作り、共有する能力・想像し、創造する能力・架空なものを描く能力」

■「現代は不安の時代～身体をつながりではなく、脳をつながり(情報交換)に時間を使ってる・安全=安心ではなくなった・安心は独りでは得られない・個人がコミュニティと切り離されている・個人が直接国家や行政と関係を結ぶ・宗教が力を失い、科学にも頼れない・世界に中心がない・フラットで均質な世界」「サル化する人間社会(山極寿一著『「サル化」する人間社会』に詳述)～優劣重視のサル社会への回帰・子

育ての経済化、機械化・集団原理(互酬性)のみの社会・共感能力の減退・信頼関係の消失・利益共同体と閉鎖的な社会」

■「デジタル社会の危機・物と人の情報化と均質化・産業と環境の超スマート化・人工知能による人間の評価と選別・遺伝子編集と生物工学・経済的、社会的、生物学的格差の増大・地球の許容力の限界値を超える破壊」

■「コロナの教訓～自己肯定感、自己実現感、社会とのつながりが失われやすい」「制約を受ける社会行為・自由な移動・対面での会話・食事の団欒・共同保育・対面授業・芸術活動・スポーツ・コンサート」「気がついたこと・人間の暮らしに必要なこと・非労働行為(子育て、家事、介護)の重要性・サービス産業の価値・オンラインで可能なこと・お金の回り方・地方と都市の価値・豊かさとは何か」

■「人間が生きる上で不可欠なのに、SDGs にないものはなんだろう？～それは文化。地球環境問題の根源は人間の文化の問題である」「AI はサイエンスとアートをつなげられるか？」

■「コロナ後の社会に必要なこと～シェアリングとコモンズの再考・感染予防を意識した生活・開かれた家族と人々のつながり・対象と集団規模に応じた適切なコミュニケーション・通信情報機器の賢い利用・五感を通じた交流・風土にあった生活のデザイン・包摂社会の建設～以上の視点から、新しいイベントの創出に活かそう」

■最後に、『「未来からの問い」日本学術会議 100 年を構想する』を紹介された。